出来なければ僕は死ぬ。

しちか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
出来なければ僕は死ぬ。

【Ｎコード】
Ｎ０９５４Ｚ

【作者名】
しちか

【あらすじ】
始まりを告げるのは、携帯に届く一通のメール。
終わりを告げるのは、それが終わったその瞬間。
人は生きるためなら、死なないためなら、終わりたくないためなら、最期を迎えたくないなら。

人はあがくのだろうか。

どんなことをしても。

どんなことがあっても。

そのあとに何が待っていたとしても。

差出不明のメール

始まりを告げるのは、携帯に届く一通のメール。
終わりを告げるのは、それが終わったその瞬間。
人は生きるためなら、死なないためなら、終わりたくないためなら、最期を迎えたくないなら。
人はあがくのだろうか。
どんなことをしても。
どんなことがあっても。
そのあとに何が待っていたとしても。

雪はまだ降っていないというのに、肌寒い季節になった。
いや、山の方に住んでいる人の話では、もう雪が降ったとか。
十二月一日。木曜日。
いつもと変わらず、いつも通り、いつものように支度をして、家を出る。
高校に入って初めての冬。
冬なんて、これまでの人生で十六回も経験しているわけだけど。
高校へと進学して、初めての冬は、どこか新鮮味があった。
冬と言っても、景色はさほど変わらない。
変わったのは、木の枝から葉っぱが消えた程度。
そして、思わず体が震えてしまう、この寒さ。
この程度の変化だけだけど、それだけでも、冬が来たことを知るには十分だ。
僕が通う学校への道の前には、軽い坂がある。

軽い、と言っても、歩くのはなかなかしんどい。
傾斜は大きくはない。しかし、距離が長い。
だから、この坂を走ることで体力を付けようとする運動部も多数いる。
ゆっくり歩けば問題ない。
けれど、ちょっとだけペースを上げて歩いてみると、少し息が切れる。
そんな坂を、僕はゆっくりと歩いていく。
下駄箱へは十分程。
靴を学校指定の上履きに履き替え、教室へと向かう。
一年生の教室は校舎の三階。一番上。
坂を歩いてきて、多少疲れているというのに、さらに階段を上らなくてはいけない。
正直疲れるが、これをほぼ毎日。
段々と、慣れてはきた。

教室へと入る。
まだ誰も来ていない。
現在時刻は七時半。朝のホームルームが始まるのは八時半。
かなり早く着いてしまったが、いつものこと。
家にいてもしょうがないので、このくらいの時間には、もう学校にいるようにしている。
することはある。
勉強したり、最近買った本を読んだり、最近買ったゲームをしたり。
窓側の一番前の席、自分の席へと座る。
一番前だから、授業中居眠りをしたり、隠れて弁当を食べたりは、やりにくい。
まあ、したことはないけど。
さて、今日は何をしようか。

授業中、ちょっと分からないことがあったし、勉強でもしよう。

――――そう、思った時だった。

携帯に着信が入った。

これはメールか。

こんな朝早くからメールということは、クラスの誰かが、今日の時間割を知りたい、とでもメールしてきたのだろう。

今日は先生の出張の都合で、時間割にちょっとだけ変更があるらしいから。

そう思いながら、携帯を開く。

新着メール一件。

差出人――――未記入。

未記入？

何も書かれていない？

たとえ、送られてきたアドレスを知らなくても、そのアドレスは表示されるはずだ。

それなのに……、何も書かれていない。

おかしいと思いながら。

そのメールに恐怖を覚えながら。

開いてはいけない、と、頭では分かっていながら。

僕は、好奇心でそれを開いてしまった。

件名：Ｎｏ．１　難易度Ｅ

本文：自身の一つ後ろにある机を　蹴れ

いたずら。

――――と、思いたかったが、本当にそうか？
差出人が書かれていないメール、これが本当にいたずらか？
怖くなる。
自分は今、夢を見ているんだと思いたくなったが、ちゃんと意識はある。
頬をつねる。痛い。
問題は、このメールの内容。
これを……、やれ、ということか？
誰かがどこかから見ているのかと、周りを見る。
教室の扉から顔を出し、廊下を覗く。
他の教室へと入っていく生徒が一人いただけで、他には誰もいない。
その生徒も、廊下を見て十秒くらい経った後に階段から現れたので、その生徒が僕の様子を面白おかしく見ていた、なんてことはおそらくない。
次に、窓から校庭を見渡す。
誰もいない。
監視カメラか何か……は、さすがに考えすぎだ。
高校生のいたずらに、そんな高価な物が使われるとはさすがに考えにくい。
やはりこのメールは、いたずらではない？
たとえば、これに書かれてある内容をやらなければ、なんらかの罰が起こる場合、これが出来るのは、誰もいない今だけ。

やってみよう。

やったところで、そのあと直せば問題はない。
今は、これを（やったらどうなるか）が知りたいのだ。

蹴った。

僕の後ろにあった机は、その後ろの机も巻き込んで、横に倒れた。

――――が、何も起こらない。

やっぱりただのいたずらか、そう思った瞬間。

携帯に着信が入る。

メールだ。

急いでメールの内容を確認する。

やはり差出人の名前は未記入。

件名：Ｎｏ．１　難易度Ｅ

本文：成功

成功？

この成功の意味を深く考えたかったが、机を倒したまま誰かが来たら面倒なので、机を戻す。

戻して少し経った後、電車で通っている生徒が一気に教室へと入ってきた。

最初に戻しておいてよかったと思いながら、授業の準備をして、メールのことなどすっかり忘れ、朝やろうと思っていた勉強の続きを始めた。

予兆

「――――さて、この問題の解き方だが」

二時間目、数学。

教師が淡々と授業を進めている。名前は角谷。

僕のクラスは全員で四十人いて、男女比は五：五。男二十人、女二十人。

今日は欠席者がいないため、四十人全員が授業を受けている。

しかし、その中で真面目に授業を受けている者など、僕を含めても十人いるかいないか。

このクラスのほとんどが、授業中に携帯をいじっていたり、隠れて弁当を食べていたりしている。

この時点ですでに問題ではあるが、もっと問題なのは――――

「青木……、は、いいか。じゃあ日下。この問題解いてみろ」

「えー……。……はーい」

――――教師が、それを見て見ぬフリをすることだ。

今挙げた問題点、真面目に授業を受けていない生徒の行動というのは、実際すぐ分かる。

教師が授業をする時に立つ教卓からでは、実は丸見えで、僕の位置からでもすぐ分かるのだから、そういう行動というのは大体分かる。

が、教師はそれを注意しない。

いや、教師と言えば、すべての教師を指しているように聞こえるので、前言撤回。

『この学校の』という言葉を文頭に置き、再度。

この学校の教師はそれを注意しない。

角谷が、指名した生徒を途中で変えた理由が。

日下が携帯をいじっていたから、だったら良かったのだが。

青木が携帯をいじっていたから日下に当てた、だから問題なのだ。

と、心の中で思っていても仕方ない。
結局、心の中で思っているだけなのだから。

どうせ携帯をいじっていても何も言われないのなら、さっきのメールの内容を深く考えていようと思い、一応隠しながら携帯を取り出す。
すると、メールが一件来ていた。
誰からだろう、と思いながら、差出人を見てみる。
「……っ！！」
差出人が書かれていない。

来た。

急いで本文を確認する。

件名：Ｎｏ．２　難易度Ｅ
本文：今受けている授業が終わるまでに
　　教師から指名され
　　「わかりません」　と　答えろ

なるほど。
つまりは、角谷に当ててもらえるかどうか、ということか。
「わかりません」と答えるのはそれほど難しくはない。
難しいのは、角谷から当ててもらうことだ。
このメールには、『教師から指名され』と書かれてある。

だから、自分から手を挙げて解答するのではなく、教師の方から指名されなくてはいけない。
このクラスは四十人いるから、四十分の一。
だけど、しっかり真面目に授業を受けている生徒は僕を含めて十人くらい。
十分の一。いや、今一人当たったから残りは九人で九分の一か。
今は十時三十分。授業が終わるのは四十分だから、あと十分で当ててもらわなくてはならない。
だが、四十分の一に比べたら、九分の一はかなり高い確率。
勝算はある。
おそらくこれは、「わかりません」と答えることが出来たら成功だと思うけれど、もし、答えることが出来なかった場合、それは失敗ということなのだろうか……。
失敗したら……？
いや、今はそんなことを考えている暇はない。
携帯をしまい、真面目に授業を受ける。
携帯を開いた状態じゃあ、角谷は絶対僕を当てないだろうから。
「――――――さて……」
実にめんどくさそうな声を出す角谷。
この「さて」は、問題を誰かに答えさせようとしている時の「さて」だ。
あと七分程度。
ここで当ててくれなきゃ時間的にも危ない。
頼む……。当ててくれ。
「……じゃあ……」
言いながら、教室を見渡す。
真面目に受けている生徒を当てようとしているのだろう。なら好都合だ。
来い！！

「次の問題を……、佐々木、解いてみろ」

なっ……！！

「え、あ、えっと……」

当てられたのは、真面目に受けている内の一人、佐々木愛華という女子生徒。

僕じゃあ……、ない。

時間はもうないというのに……！

「……すいません、……わかりません」

「えー」

ものすごくがっかりした声を出す角谷。

これはチャンス！

また指名するのめんどくせーという顔で、渋々また教室を見渡す。

「じゃあ……、一条。お前解いてみろ」

来たあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

一条。一条護（いちじょうまもる）というのが僕の名前。

「はいっ！」

嬉しさのあまり、声も自然と高くなる。

角谷もこの声を聞いて、やっと答えられる奴がいた、とホットしている。

しかし、僕が言わなければいけない答えは、角谷をさらにがっかりさせるであろう。

「わかりませんっ！」

角谷の「お前、自分分かりますよって目でこっち見てたじゃねえか」という絶望した顔に、ちょっとだけ罪悪感を覚えた。

件名：No.2　難易度E

本文：成功

ルール説明

昼休み。
僕はいつも弁当を持って来て食べている。
食堂に行って食べたり、購買で何かを買ったりしてもいいのだけど、そこまで行くのがめんどくさいという理由で、いつも弁当持参にしている。

それにしても、このメールは何なのだろうか。
今日の朝から届くようになったこのメール。
件名には「Ｎｏ．」と書かれていて、何通目かを知らせるものなのか、その横に数字が入っている。
そして、難易度Ｅ。
これはどういうことなのか。
アルファベットで段階分けされているのだとしたら、これが一番難易度が高いのか、それとも違うか。
メールの本文から考えれば、おそらくは簡単な方の部類だと推測できる。
本文に書かれていた内容を実行するのは、大して難しくはなかったから。
最後に、本文。
まだ二通しか来ていないから、どういうものかはよく分からないが、これまでのものを見ると、そこに書かれていることをやれ、ということなのだろう。
内容は今のところ難しくない。
二通目は場合によっては難しかったけれど、運が良かったと言っていい。
最初はいたずらかと思ったけど、いたずらにしては高度過ぎる。
一通目の内容を実行した際、確実に周りで誰かが見ている様子は

なかった。
それなのに、実行した後、本文に『成功』とだけ書かれたメールが届いた。
考えれば考えるほど分からなくなる。

とりあえず、昼食を済ませ、ゆっくりと考えることにしよう。
焦っていても仕方のないことだ。
と、弁当を開けようとした瞬間。

「……メールっ」

携帯に一件のメールが入った。
「――――せめて食べてからにしてくれよ」
思わず口に出してしまった。
仕方なくメールを確認する。差出人はやはり書いていない。

「あれ？」

件名：ルール説明
本文：Ｎｏ．１、Ｎｏ．２を成功した皆さんにお届けしています
どちらか、またはどちらも失敗してしまった方には
今日のどこかで『死』が待っておりますのであしからず

これは……。
いつもと違う感じに困惑しながらも、僕は最後の二行に恐怖を覚

えた。
失敗してしまった方には、今日のどこかで『死』が待っている？
それはつまり、今日中に死ぬということか……？
それより、僕以外にもこのメールを受け取っている人がいるのか？
しかも……、多数。
僕だけじゃなかった。
このメールが届き、いつもの日常を壊されたのは、僕だけじゃなかった。
人生を終わらせられた人も、いるってこと……。
「なんだよ……、これ」
僕は弁当を食べずに、廊下へと出る。
そしてトイレへと駆け込み、洋式トイレに入って、鍵を閉める。
ズボンは下ろさずに腰をかけ、今の本文の続きを読む。

本文：（続き）
成功した皆さんには　引き続きこのゲームに
参加して頂きます
降りたいという方がおられましたら
このメールに返信をください
しかし　費用が百万円ほどかかりますのであしからず
このゲームのルールは簡単
これから送られてくるメールに書かれた『指令』を
実行し　成功していけばいいだけ
しかし　失敗すれば　失敗したその日の内に『死』がやってきます
成功すれば『死』が来ることはありませんのでご安心くだ

さい

このゲームのクリア条件は　メールに書かれた『指令』を
成功していき　Ｎｏ．１３　までこなすことです
Ｎｏ．１３　までこなした方は　ゲームクリアとなり
次のゲームに進むか　降りるかの選択肢が与えられます
この時　降りる際には費用はかかりません
難易度　というのはその『指令』の難易度を表します
Ｅ…ｅａｓｙ
Ｎ…ｎｏｒｍａｌ
Ｈ…ｈａｒｄ
と　いった具合です

それでは
皆さんの健闘を期待しております

これを読み終えた時、僕は、自分の人生で遊ばれているんだと、
分かった。

難易度H

放課後。

今日の授業をすべて終え、生徒のほとんどはそれぞれ部活動に励むが、部活動に所属していない生徒、もしくは、部活動に所属しているのに活動をしない生徒は、帰宅するか、寄り道をしたりする。

僕は部活動に所属していない。

中学の頃はソフトテニスをやっていたが、才能のない者の限界というものを、中学の頃に嫌というほど味わい、続ける意味を自問自答した末に、やめることにした。

正直に言えば、続けたかった。

けれど、続けたところで、勝つことができない。

僕には才能なんてない。

才能のある人間なんて大勢いる。考える以上に。

そんな人間達を相手取って、結局負けてみじめな思いをするくらいなら、いっそやめよう。

そう思って、やめた。

所詮、逃げただけ。

だけど、逃げることも、時には必要なんじゃないかと僕は思っている。

朝来た道を、再び通って家まで歩く。

朝とは、なにもかも違いすぎて、この道が全く別の道のように感じられる。

全部、このメールのせいだ。

もう一度、いや、もう何度もこの『ルール説明』と書かれたメールを読み返している。

読み返すたびに、現実感を失くす。

それほどこのメールの内容は、非現実的過ぎる。

と。

思っていた時だった。

「――――っ！」

メールが来た。

もう、見たくはなかったが、見なければ死ぬ。

その内容を実行しなければ、死ぬのだから、見なければいけない。

差出不明。やはりこのメールは……。

件名：Ｎｏ．３　難易度Ｈ

……！！

このメールが届くようになってから、初めての難易度Ｈ。

ｈａｒｄ……。つまり、『難しい』ということ……。

本文：今日中に

自分が　今　一番好意を抱いている

女性　に　告白　せよ

難易度……H、……か。
一見、簡単そうにも見える。ただ告白すればいいだけなのだから。
だけど、これは、最悪友達関係をぶち壊す行為。
振られる前提で考えても、これはなかなかきついな……。
今日中か。もう学校は終わっているから、チャンスはあると思える。
一番好意を抱いている女性……。
ぶっちゃけ、数学の時間に、角谷に指名されていた佐々木愛華さんに、僕は一番好意を抱いている。
けど、彼女に告白はしないと決めていたのに……。
彼女とは小学生の頃から一緒なのだが、結構良好な関係を保てていた。
だが、告白してしまえば、どうなろうと今まで通りとはいかなくなる。
今までの関係が、壊れてしまう。
しかし、やらなければ『死』が待っている。死んでしまう。
関係が壊れるのも嫌だが、それ以上に死んでしまうのは嫌だ。
やるしか……、ないか。
彼女の連絡先は知っている。
たまにメールを交わすときはある。
そのメールのやり取りから考えても、僕に好意を抱いているとは全く思えないし、僕も好意があると悟られないようにしている。から、おそらく『この告白』が『成功』することはない。
けれど、告白さえ出来れば、それでこの『指令』は『成功』だ。
……。告白の方法は……、なんでもいいのか？
まあでも、告白するのにメールとか電話なんてチキンな真似はしないさ。
正々堂々、正面からやって、玉砕してやるよ。
とりあえず彼女にメールを打つ、吹奏楽部に入っているらしいか

ら、まだ部活動中だろう。だから、部活動が終わったら体育館裏に来て、と送った。
今の季節は暗くなるのが早いため、部活動も終わるのが早くなっている。
今は四時丁度。五時くらいにはどの部活動も終わるはずなので、あと一時間。
自分の意思の告白ではないにしても、この一時間を使って、しっかり言葉を考えようと思う。
彼女はこっちの事情なんて知らない。
だからと言って、事情を正直に話しても、それはただの『逃げ』。

逃げ……？

一時間が経った。
時刻は五時。
そろそろ部活動が終わる時間だけど……。
と、そこで、携帯に着信が入る。
携帯を開き、メールを確認。
差出人は……、佐々木愛華。
書かれていたことに安堵しながら、名前を見て緊張しながら、本文を確認する。

件名：Ｒｅ：話がある
本文：今部活終わったよ（＾＾）
今から行くね（＞Ｏ＜）

さて……。
いくか。

ここからが本番　前編

「ごめんね、かなり待たせたよね？」
目の前の佐々木愛華は、息を整えながらそう言った。
どうやら、部活動が終わったあと、走って来たらしい。
「大丈夫だよ。それより、走ってこなくても良かったのに」
僕が勝手に思いを伝えてそれで終わりなのだ。部活動ですでに疲れているのに、走るなんて、さらに疲れるようなことをしなくても……。
罪悪感。
そして、同時にこのメールに憎悪した。
「だって、何か話があるみたいなのに、一時間近くも待たせちゃったし……。走らなくちゃ悪いよ」
本当に素直で良い子だと思う。
メールを送ったのが一時間前なだけで、その一時間をずっとこうやって待っていたとは限らないのに……。まあ、僕は待っていたわけだけど。
「ありがとね。だけど、そんなに大したことじゃないと言うか……」
いや、大したことあるか。何せ命懸かってるし。
「何かあったの？」
君に告白しないと死んじゃうんです。
――――とは、さすがに言えないなあ……。
「あ、あのさ……」
くぅ……！
言葉は一時間たっぷり使って考えたのに、いざという時に出ない！！
告白って……、難しいなっ。
「うん？」

くっそおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！！！
せっかく普通ならもう帰っているはずの時間を、わざわざ走ってきてくれたというのに、僕は何をやっているんだ！
自分の意思の告白でないにしろ、さすがにこれは僕が悪いぞ！

「……っ！」

言え！

「？？？」

言え！

「……っ！！」

言え！

言え！

言えっ！！！

「愛華が好きだっ。だから、僕と付き合って欲しい……！」

「……え？」
目を丸くして、驚いた様子で僕を見ている。
言えた……。
なんとも言えない、達成感だ……。
メールのことは関係なく、どんな返事が来てもどうでもいいくらい、達成感が大きい。
気持ちを伝えるのは、悪くない。
「……えっと……」
いいよ、考えなくていい。
思いっきり振ってくれて構わない。
そう思えるほどに、気持ちがよかった。
携帯に着信が入る。おそらくは『成功』のメールだろう。
しかし確認するのは、彼女に振られた後――――

「……はい」

は？

「私でよければ……、お願いします」

……え？

ここからが本番　中編

辺りはもう暗く、太陽はすでに沈んでいた。
一条護と佐々木愛華の一連のやり取りの最中、校舎三階の一番端にある教室で、二人の人物がとあるやり取りをしている。
「……どうやら、この学校にも何人かいるらしいな」
暗いので外見はよく分からないが、男の声。
「そりゃあそうだろう。何たって、この出雲高校は『そういうための学校』だしな」
今度は女の声。
「一番進んでいるのは誰だ？」
男が女に向かって問いかける。
「お前だろ。さすがにＮｏ．９まで進んでいる奴はいねぇって」
「入鹿（いるか）、お前だってもうＮｏ．８だろ」
男は女に向かって、確かに入鹿と言った。女の名前だろう。
「神灯（しんとう）には敵わないさ。それより、お前はこのゲームが終わったら、……降りるのか？」
入鹿は男に向かって、神灯と言った。男の名前とみていいだろう。
「馬鹿言え。こんな楽しいゲーム、降りるなんてもったいない。命が惜しい馬鹿共ならともかく、俺は天才だからな。死ぬわけない」
自信満々に言い放った神灯の目には、確かな自信を感じる。
入鹿はそれを聞き、暗いながらも確かに感じる神灯の自信に安心を覚えた。
「だろうね。お前がそんなヤワな男じゃないって思っていたけど、やっぱりお前はヤワな男なんかじゃないね」
「だけど」
神灯の顔が厳しいものへと変わる。
「ああ。やっぱりそう思うかい？　私も同じことを考えてたよ」

入鹿はどこか余裕を感じさせながらも、それでも緊張感を出している。
「俺達の、いや、俺の最大の敵……。好敵手、いや……ラスボスと言っていいな」
「あいつを倒さなきゃ、私達が次に進むことはおそらく出来ない」
「おいおい。それは違うだろ」
入鹿の言ったことを訂正するように神灯は言う。
「『あいつに勝たなくても進むことは出来る』、けどそれは俺達の負けだと言っているようなもの」
「だから、あいつに勝つことは絶対条件。よね？」
「ああ」
「じゃあ、どうせ倒すなら、早い方が良いと思うんだけど」
「俺もそう思っていた。なら、行くか」
神灯は廊下へと続くドアの取っ手に手をかける。

「……『一条護』。お前はここでゲームオーバーだ」

僕は固まっていた。
思いもよらない、予想外の事態に、困惑していた。

告白が……、成功してしまったのだ。
携帯に届いた指令から行った、言えば『やらせ』の告白。
好意はあるし、告白したいとは思っていたけど、『やらせ』だ。
本当に告白したかったわけではない。
好きだけど、付き合いたかったけど、イチャイチャしたかったけど、制服デートとか憧れていたけど。
まだ、早いと思っていた。
この気持ちは、まだ抑えておくべきだと思っていた。
自分の気持ちはちゃんと伝えなきゃ後悔する、とか、自称恋愛マスターみたいな奴が言いそうな言葉がある。
確かにそうかもしれない。
伝えなければ、後悔するかもしれない。
伝えなければ、誰かに取られるかもしれない。
それは、嫌だ。
だけど。
だめだ。
僕が彼女に思いを伝えるのは、僕自身が彼女と釣り合えるようになってから。
ある程度成長して、付き合ってから一緒に成長していく。
そういう恋愛に、僕は憧れていた。
なのに。
どうしたらいい？
僕は……、もう佐々木愛華とは『友達』ではない。
『彼女』だ。

「あ……、あの……」
僕は思わず、事の全てを話そうとしていた。
「佐々木……、さん」

「…はい」
待て。
これは本当の告白じゃない、と言って、彼女はどう思う？
命懸けにしろ『偽りの告白』で、それに『はい』と答えた彼女は、どう思う？
口に出そうとして、それをまた引っ込める。
僕は今、最低な事をしようとしていたんじゃないのか。
「な、なんでもない……！　えっと……。あの……」
こうなった以上、僕は佐々木愛華と付き合うしかない。
ネガティブ思考で考えてはいたけど、ポジティブに考えたらこれほど嬉しいことはないんじゃないか？
『偽りの告白』にしろ、それに『はい』と答えたということは、僕に好意があるということじゃないのか？
そう考えると、途端、嬉しくなってきて、
「ちゅう……、しない？」
最低な発言をしてしまった。

「え！？」
「……！　撤回、撤回！！　違うんだ！！　これは本音が思わず出たと言うか、心の奥底に眠っていた思いが表に出てきてしまったと言うか…、決して、それが目的で告白したわけじゃないから！！」
弁解になっているのかよく分からない言葉を並べる。
これはまずい。
いくらなんでもだめだ、『偽りの告白』よりも最低じゃないか？
「…あの、私でいいなら――――」
と。
佐々木愛華の言葉を最後まで聞くことが出来ずに、なにかの音が彼女の声をかき消す。

さらに、『刃物』が、彼女の体から現れた。
まるで、『後ろから刺された』みたいに――――。

佐々木愛華の声を聞くことが出来なかっただけでなく、僕は二度と、佐々木愛華の声を聞くことが出来なくなった。

ここからが本番　後編

「じゃんけんで決めよう」
神灯は入鹿に向かってそう言った。
「何を？」
「目の前の、あのラブコメを終わらせる役」
「えー。神灯ひどいー」
入鹿はニヤニヤしながら、実に楽しそうに言う。
「だってお前、あれを目の前で見せつけられたら、壊したくならない？」
神灯は手に持っている『刃物』を、目の前にいる男女の方に向ける。
入鹿と神灯と、その男女の距離は三十メートルほど離れている。
「いいじゃん。どうせ『やらせの告白』だし」
「まあなー」
つまらなそうにその男女を見る神灯。
「じゃあ、じゃんけんじゃなくて、賭けで決めない？」
「うん？」
「告白が成功するか、失敗するかでどっちが壊すか決めるの」
「いいな、それ」
神灯のつまらなそうだった顔が、一瞬にして楽しそうな顔へと変わる。
「じゃあ、おれは失敗に賭けるよ」
「それなら、私は成功。成功したら、あんたが壊すんだからね」
「分かってるよ。失敗したらお前やれよ？」
「もちろん」
二人は男女の様子を、注意深く観察する。
そして――――

「やったあ。告白は成功したみたいよ～？」
両手を挙げて、喜ぶ素振りを見せる入鹿。
「くっそ……、なんで振らないんだよあの女……」
対して神灯は、強く地面を蹴り、悔しがる素振りを見せた。
「さ、いってらっしゃ～い」
「仕方ないな。別に、壊せば何やったっていいんだろ？」
「もちろん」
神灯は悔しそうに、入鹿は楽しそうに言う。
「…殺しても？」
「…もちろん」
神灯も入鹿も、声のトーンが変わった。

「悪いな、一条護。お前の彼女殺しちゃった」
あまりに突然のことで、状況が全く理解できない。
僕は佐々木愛華に告白した。そして、成功した。付き合うことになった。
それはいい。
だけど、今、その佐々木愛華は僕の目の前で倒れている。
僕の『彼女』は今、僕の目の前で横になって倒れている。
そして、その後ろに男が立っていた。
今の声もこの男。
この男が、殺した？
「ん～…。あまりの驚きで状況を飲み込めていないな？」
「あ……、あ……」
何かを言おうとするけど、言葉が出ない。
出せない。

「じゃあ一応説明するとな、俺がこの女のことをこの『刀』で後ろからグサッとやっちゃったわけだ。んで、倒れちゃって、死んじゃった。理解できたか？　無理か」
男が何かを言っている。
何を言っている？
「神灯、そんな説明じゃあさすがにだめよ」
その後ろから、今度は女が現れた。
佐々木愛華もなかなかの美人だったけど、この女も同じくらいか、それ以上に美人だ……。
「いい？　ちゃんと聞いててね、一条君。彼は、ここにいる『神灯』って男はね？　あなたの『彼女』を殺したの」
「俺の説明よりあっさりじゃねえか」
「このくらいの方が逆にいいのよ。今の一条君の精神状態じゃあ、あまり詳しく説明しても分からないだろうから」
「なるほどな、でも、それでも分かってないみたいだけどな」
さっきから、この二人は何を言っている？
「あー、一条君。そう悲しむこともないわよ？　どうせ彼女は今日で『死んだんだから』」
「だから、さっきから何を言ってるんだよ！！　お前らは！」
やっと、言葉を出すことができた。
「やっと絞り出した言葉が、彼女ではなく俺達への言葉、か」
「私達はね、一条護、あなたを『このゲームから降ろす』ために来たの」
「ゲーム……、お前ら、まさか俺と同じ……」
「ちなみに、俺が殺したその女も、ゲームに参加してたんだぜ」
「え？」
言われて、ハッとする。
目の前で、佐々木愛華が倒れている光景を見てしまう。
見ないように、していたのに……。
「なるほど…。神灯、どうやら一条君は賢いわ。自分の心を『護る』

ために、彼女が死んだことを必死で認めたくなかったから、第一声が彼女へ、ではなく、私達だったみたい」
「あー。それは悪いこと言ったな。すまん、今のは忘れてくれ」
「無理に決まってるじゃない」
何がどうなっている？
僕は……、どうしたら……。

「さて、一条君。さっきも言ったように、私達は彼女を殺すために来たのではなく、あなたをゲームから降ろすために来たの。あ、もちろんお金はないから、あなたの『指令』を邪魔して『失敗させる』か、『今ここで殺す』かのどちらかなんだけど、まあそれは置いといて」

「一条護。お前が今までやってきたものは全部『小手調べ』みたいなもんだ。言わば、『練習』だな。ここからが本番だぞ？」

――ここから、本当のゲームが始まる――

恐怖

僕は、走った。
あの場から逃げるために。あの二人から逃げるために。
あの光景を、もう見ないようにするために。

神灯が言葉を発した直後、一条は逃げるように神灯と入鹿が立っている方向とは真逆に走った。
「逃げる、か。まあ最善って言えばそうか。俺達相手に勝てるわけないからな」
神灯は感心するように、うんうんとうなずいていた。
「いいから、早く追って。ここで決着を着けられなかったら、また探すのが面倒になる」
そんな神灯に、追跡を促す入鹿。
「何言ってんだよ。別に、あいつは学校があるんだ。例えここで決着(ケリ)着けられなくても、探すのなんて簡単じゃねえか」
「そんなだから、お前は力仕事しかもらえないんだよ。お前、自分が狙われてるって分かってるのに、わざわざ学校なんかに来るか？」
呆れた顔で入鹿は言った。
「俺なら家で寝てるな」
「だろう？　普通は家から一歩も出ないか、安全な場所に隠れるかするだろ」
一条は、神灯と入鹿から命を狙われていると分かっていて、それでも変わらず学校に来ることはおそらくない。学校に十分な警備体制があればまだ別だが、そんな学校はないし、あったとしても、登下校を狙われれば成す術がなくなる。もちろん、この高校にそんな

ものなどない。それなのに学校に来るのは、あまりに軽率過ぎるということだ。
「ここで逃げられたら、狸寝入りされるってことか……」
「そういうことだ。さ、早く追って」
「あいよ」
神灯はそう言うと、今一条が走っていった方向へ走りだした。一条よりもはるかに速いスピードで。
「あいつの身体能力は、並の人間のそれをはるかに上回るからなー。一条君程度じゃあ、すぐ追いつかれるのがオチだね」
そう呟いてから、入鹿も同じ方向へと歩いて行った。

どうする？
走りだしたのはいいけれど、どこへ向かえばいいのか分からない。学校を出て、家に行ったとしても、まず家までの道中で追いつかれない保証はないし、着いたとしても、明日学校へはとても行けなくなる。
ほんとに、どうする？
いろいろと考えなければいけないことはある。
佐々木愛華のことも。ゲームのことも。あの二人のことも。
分からないことが多すぎて、自分が今何をしているのかも分からなくなってくる。
僕は一体、どうすればいい――？
「まあ落ち着けよ。気楽にいこうぜ、硬くならずにさ」
突然、進行方向にある曲がり角から現れたのは、神灯と呼ばれていた男。
体育館裏から、校舎の中へと逃げ込んだのは、間違いだったか……。
だけど、なぜこんなにも早い？

僕の走る速さは普通と言っていいくらい並のスピードだけど、さすがに追いつかれるのが早すぎる。
しかも、目の前から現れた。
先回りをしたということ？
僕が逃げてから、結構遅れて追ってきたはずなのに？
校舎に入る際にあの二人を見た時、まだ話していたはずなのに？
こいつのスピードが、速いのか……？
「一応言っておくけど、おれはここでお前を見逃すなんて奇跡は絶対起きないから安心しろよ？」
一歩、こちらへ近づいてくる。
「お前がおれから逃げることができるのは、おれが死んだ時くらいじゃないかな。まあ、それでも、入鹿が来る前にやらないと、入鹿も殺さなきゃいけなくなるけどな」
さらに、一歩。
神灯の手には、『刀』と呼べるほどの長い刃物が握られていた。
あれで……、佐々木愛華を……。
「お前を殺して、おれは次のゲームに進むんだ！」
そう言って、僕に向かって突進してくる神灯。
これは、なんだ？
闘い？　戦い？　殴り合い？　殺し合い？　斬り合い？
――――斬り合い？
「……こんなところで、死にたくはない！」
僕は叫んだ。

三分ほどで、入鹿はそこへ着いた。
入鹿がそこに着いて、まず感じたことは二つ。

一つは『最愛の者がいなくなる悲しみ』。
もう一つは――――
「お前も、殺さなきゃいけないのか？」
一条護への、『恐怖』。

No. 5

別に、一条護は実は空手五段だったり、柔道とか剣道とかの段を持っているわけでも、親から毎日地獄の特訓を受けてほぼ無敵の強さを持っていたり、毎日ケンカばかりの日々に身を置いていたからケンカはかなり強いわけではない。

そんな後付け設定みたいな、主人公補正みたいなものはない。

いや、多少主人公補正はあるかもしれないが、だからと言って、特別強いわけではない。

しかし、入鹿は、それは嘘だと主張するような、そんな光景を見てしまった。

一条護が、血を流しながら倒れている神灯の傍で立っている光景を。

目がおかしくなったのかと思い、入鹿は思わず目をこすってもう一度よく見る。

どう考えても、逆のはずだ。

今とは逆の光景を確信していた入鹿にとって、この光景は受け入れられなかった。

信じたくなかった。

けれど、もう一度目をこすってよく見てしまったことで、受け入れなければいけなくなってしまった。

確かに、『入鹿が想像した光景』とは、『逆』だった。

絶句しながら、絶望を感じながら、それでも、精神を保とうとする。

これは余談かもしれないが、入鹿と神灯が愛し合っていた。

一生一緒にいる、と、誓い合った仲だった。

目の前で最愛の人が倒れているのを見て、取り乱すことなく、外見を落ち着いているように見せる入鹿の精神力は、大したものだと

言える。
ただ、外見だけ、だ。
内側がどうなっているかなど、知れている。
言葉を出せば、声の震えで自分がどれだけ動揺しているか知られてしまうかもしれない。
逆に声を出さなければ、声が出せないほど動揺していると思われてしまうかもしれない。
意を決し、入鹿は重たい口を開く。
「一条君。あなたが、やったの？」
入鹿は内心、自分をよくやったと褒めていただろう。
動揺しているなどまるで感じさせない、そんな言葉を出した入鹿は、本当に大したものだ。
だが……。
「……動揺を隠さなくたっていいよ。分かってるから」
入鹿は驚愕よりも唖然とする。
絶対に、動揺しているとは悟られない自信があった。動揺しているだなんて微塵も思わせない言動を、したつもりだった。
それなのに、一条護には見破られたのだ。
いや、見破られたのとはちょっと違うのかもしれない。
まるで、最初から分かっていたかのような――――
「それより、もう一度言うよ？　お前も、殺さなくちゃいけないのか？」
その言葉には、悪意とか憎しみとか、そういう感情なんて入っていない。あるのは、自分を守るための、自分が死なないために人を殺す覚悟だった。
入鹿は一条の言葉にそれが入っていることを即座に理解し、一条が人を殺す覚悟を決めていることを悟ったが、腑に落ちない点があった。
果たして、一条がそう簡単に人を殺せるのか。
神灯と入鹿を目の前にし、戦うよりも逃げることを図った一条。

相手が二人だから勝ち目が無いと分かっても、戦うつもりなら工夫を凝らし、神灯と入鹿を分担させ、個別に撃破するという手はあった。
結果的には分担させたのだが、あくまでも結果論。
もし本当に戦うつもりなら、もっと考えて逃げるべきだった。
神灯と入鹿も、その逃げっぷりからそういう考えなどまるで無いと気付き、個別に追ったのであって、やはり一条に戦う気はなかった。
はずなのに、今の一条には、逃げる気配などない。
戦う決意が見て取れるほどに、覚悟を決めている。
「あなたがどうやって神灯を殺したのか知らないけど、あなたが私に殺意を向けるのなら、覚悟を決めなければいけないようね」
殺意を自分に向けないのなら殺さないであげる、と。上から目線であり、さっき自分の言ったことを無視しながら言っているように聞こえる。
プライドが高いのか、それとも低いのか。
はたまた、自分を守るための、虚言、か。
「『どうやって殺したのか知らないけど』？　何を言っているんだ、あんた。一目瞭然じゃないか」
当たり前のように言う一条だが、入鹿にはその言葉の意味は分からない。
一目瞭然と言われても、入鹿には何が起こったのかを理解できるほど、心に余裕なんてない。
「僕がこいつから刀を奪って、逆に斬ったんだよ」
入鹿はその言葉を聞かないように、意識を別なところへ向けていた。
目は一条に向けたまま、一条が着ている制服を見て、なんでこんなデザインなのだろうと勝手に一人で思案することで、聞く耳を持たなくした。
だけど、それは間違いだった。

意識を『一条』からそらしてしまったことで、一条の接近を許してしまった。
「……ッ！？」
自分を守るための、行動。
それがまさか、自分を『殺す』ことになるとは、入鹿は考える余裕などなかった。
「本番が始まったのなら、僕はもう、覚悟を決めなきゃいけないんだよ！」

出雲高校。二年二組教室前。
及び、体育館裏。
二年一組　神灯　光（ひかる）
二年一組　入鹿　楓（かえで）
一年三組　佐々木愛華

生徒三人の死体が発見されたのは、十二月一日木曜日、教師が見回りをしていた時のこと。
全校生徒が知ることになったのは、その次の日の十二月二日、金曜日の朝、ＨＲの時間。

この日の授業は全て自習。
クラスが静まり返り、沈黙を保っている中、一条はそっと携帯を開く。
差出不明のメール。

件名には、『Ｎｏ．５　難易度Ｎ』と書かれていた。

どちらを選んでも人が死ぬ二択

出来れば話を早く進ませてとっとと終わらせるのが一応のぼくの目標なので、時間を巻き戻して過去編突入みたいなことはしたくないのだけれど、ただ、これからこの物語を進めていく上で、もう一度十二月一日の放課後のことを書かなくてはいけないので、ちょっとだけ時間を巻き戻すことにする。

丁度、一条が神灯と入鹿から逃げている場面から始めよう。

一条視点で、二人から逃げている最中のところから。

そうだ、警察を呼ぼう。

あの二人から逃げている最中（さなか）、僕は校舎へと逃げ込み、それを思いついた。

確実に、あの二人は僕を殺そうとしている。

僕を『ゲーム』から降ろすために。

でもなぜだ？

別に、この『ゲーム』に参加者同士が戦う意味なんてないはずだ。あの二人のどちらか、もしくは両方に『僕を殺す指令』が出たのなら分かるが、それ以外で、殺し合う意味なんてない。

僕を殺す指令が出たのか……？

だとしたら、何としても逃げなければ。

僕だってここで死にたくはない。

生き延びて、こんなくだらない『ゲーム』から『降りたい』。

だけど、僕が生き延びれば、あの二人もしくは片方の指令は失敗したことになるから……。

「僕が生きても、死人が出てしまう……？」
携帯を開こうとする僕の手の動きが止まる。
警察を呼び、保護してもらえば、あの二人は僕を殺せなくなる。
どころか、ちゃんとした証拠があれば、あの二人は逮捕されることになる。
そうしたら、期限がいつまでなど関係なく、僕を殺すことはおそらく不可能。
指令は、失敗になる。
人殺しなんて、したくはない。
直接でなくとも、僕がここで警察を呼べば、僕が殺したようなものだ。
でも、呼ばなければ……。僕が死ぬ。
どちらを選んでも人が死ぬ『二択』を選んでいる最中、携帯にメールが届いた。
こんな時に……とも思ったが、走るペースを少し抑え、携帯を開く。
メールは二件。
一件は、成功を報告するメール。
そしてもう一件は、新たな『指令』。
どちらも、差出不明のメールだ。
僕は新たな指令の方のメールを開く。
そこには――――

件名：Ｎｏ．４　難易度Ｈ
本文：自分　を　殺そうとする
　　者　を　二人　殺せ

これは、あの二人のことなのだろう。
けど、殺せ？
どちらを選んでも人が死ぬ二択。第三の選択肢などない。
それがさっきまで僕が思い、悩んでいたこと。
だが、ないはずの『第三の選択肢』が出来てしまった。
そして僕は、それを選ばなければいけなくなってしまった。
僕が、あの二人を直接殺すという選択肢を。
僕が、殺す。
それしか、僕が生き残る手段は、ない。
覚悟を――――決めなければ――――

「……こんなところで、死にたくはない！」
僕は叫んだ。
刀を向け、僕に向かってくる男を、殺す覚悟を決めた。
戦う覚悟を、決めた。
速いが、追える。
覚悟を決めたからか、この男に勝てる気さえしていた。
本能。
生きるための本能が、僕を化け物にした。

一条が、人を殺す覚悟を決めた瞬間。
そして――――人を殺した瞬間だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0954z/

出来なければ僕は死ぬ。

2011年12月25日21時09分発行